

DAViK システムによる

北・北海道の地域発展ゴール形成

—新しいオピニオン・テクノロジーの開発—

司馬正次・小林博道・阿部昌信

1. はじめに

北・北海道(留萌から天塩にかけての日本海側)は、これからの発展の可能性を大きく秘めた地域だ。しかし、現在は大規模な港があるわけではなく、自然資源とて他地域に較べてぬきんできた特色をもつわけではない。かつて栄えたにしん漁の面影はいまやない(図1)。

このような地域の将来の発展をどのように考えれば良いのだろうか。外からの力もさることながら、なによりもそれらの地域に住む人達が一体となって自らの方向を見定めることが必要だ。われわれは、昭和53年より、住民自身の開発ゴール形成への支援システムづくりを行なってきている。そして、その過程でいくつかの新しいオピニオン・テクノロジーを開発してきた。以下に述べるのは、昭和54年に開発したDAViKシステムの一成果についてである。

2. 対話集会の欠点

すでに述べたように、北・北海道では発展の中心となるべき資源が顕在化しておらず、また主導的な企業もほとんど存在しない。そのようななか

しば しょうじ 筑波大学社会工学系, こばやし はくどう 筑波大学芸術学系, あべ まさのぶ 北海道立寒地建築研究所

では、行政のリーダーの将来ビジョンとリーダーシップが地域発展に大きな影響をもつのは当然である。しかし、その時、行政のリーダーの独走であってはならない。常に一般住民との意志疎通のなかから、将来像を形成していくことが望まれる。

行政において住民との合意形成に最も早く、組織的に取り組んだのは、美濃部知事時代の東京都である。「対話集会」という新しい方式を創り出すとともに、知事在職中に206回、延べ3万3812

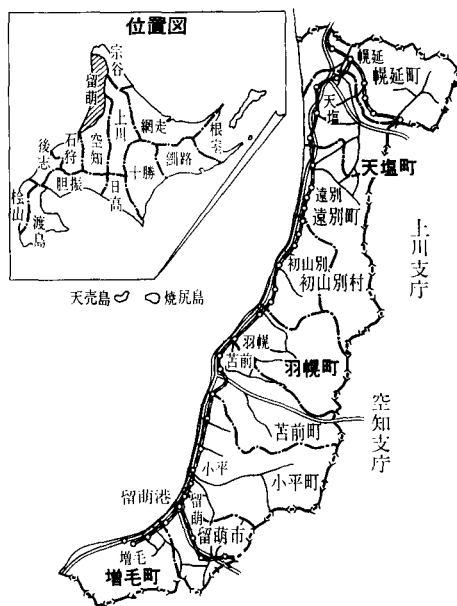


図1 北・北海道(留萌支庁管内)略図

人の都民と対話を行なった。

しかし、この画期的な対話集会方式はどうもしっくりしない。住民の側からは「話しあったという行政の実績づくり」との声があがる。一方、主催する行政の側では「話がとかく断片的、感情的になりがちで、思うほど生産的な効果が上がらない」という。そして、自治体における「対話集会」はめっきり最近では影をひそめるようになってきた。

対話集会が合意形成の機能を充分果せなかった原因は2つある。ひとつは対面して主張しあう風土のなさである。わが国には相互に主張をぶつけあい、そこから新しいものを生み出す風土が少ない。とかく、角をたてての争いになりがちである。これを防ぐため、根回しの上に立った儀式としての討論が横行することになるのだ。

第2の原因は、話しあえばわかるという誤った信仰である。価値の多様化がすすみ、個人の思考が大きく乖離しがちな現在、対面して話しあうことですべてが解決するはずがない。その話しあいを生産的に進行するための工学、別の言葉でいうならハード・ウェアとソフトウェアが必要である。

3. 直接対決型討論をさけるための方策

上に述べた第1の欠点を克服するため、北・北海道におけるプロジェクトにおいては、ビデオの導入をはかった。

すなわち、首長のメッセージをビデオにおさめる。次にそれを住民の集まる場に持参し、“家庭”のテレビを通して首長の考えを住民に伝える。

一方、住民側からの伝達に際しては、グループ作業の形をとる。5、6人でグループを作り、述べたいことをまとめる。その上でグループ全員の発言をビデオに収録する。そして、そのテープを首長がみる。このような間接型のコミュニケーションのチャンネルづくりを試みたのである。

この方式のメリットは3つある。

(A) 即時性、直接性からの解放

1問1答式の即時対話においては、部分的な対応であったり、言葉尻をとらえての感情的な対応になりがちである。しかし、ビデオによる対話では相手の主張を最後まで聞くことを必要とするため、好むと好まざるとにかかわらず相互に全体的な把握の上での話しあいとなる。さらに、相手がテレビ画面を通してのものであるから、直接対話より、はるかに客観的に対応できる。つまり機械に対する反応と似た余裕と自制を情報の受け手に与えるのである。

さらに行政の場合、即時性をあえて避ける必要性も存在する。住民からの質問や意見の中には、充分調査・検討しなければ解答できないものも多い。そのような場合、「のちほど検討して……」を連発していたのでは相手に不信感を与える。その点の解消にも役立つのである。

(B) 不可逆的な伝達

ビデオによるコミュニケーションは不可逆的であり、聞きかえされることのない、いわば一方通行の会話である。話し手は聞き手から問いつめられることがない。また聞き手も“誤解する権利”を保障されるとともに、相手から面と向ってやりこめられるわけでもない。見方によれば、まどろっこしいコミュニケーション方式といえるかも知れない。しかし、われわれの社会では、差異を明確にしてそれを超越していくより、類似点を統合していくのに親しみを感じる。その国民性にはかえって合致していると考えられる。

(C) 疑似全人間(格)的な伝達

これはビデオの大きな特色である。文章や音声と較べるならはるかに情報量が多い。特に非言語的な情報もあわせて伝達できる。これは、コミュニケーションに論理と並んで情報の要素をもちこむ可能性を与える。合意形成は論理による納得だけでは充分ではない。“ああ、なるほどそうだ”という共感の要素がなければならない。ビデオはそれを生み出す基本的条件のひとつを備えている

のだ。

4. 生産的討論のための技術開発

ビデオの導入とともに対話を発展させるための新しい技術として、3つの技術を導入した。第1は、対話を2次元化して記録する技術である。話や討論は時間の経過とともに一方向に流れ、しかも消えていってしまう。

それをとらえるため、われわれはKJ図解の導入をはかった。すなわち、ビデオを通しての話し手の主張をKJ図解化しても表現し、まず話し手の伝えたい内容を定着させる。それとともに、聞き手全員の間で共通の土俵づくりをはかったのである。

第2は論点を集約していく技術である。議論が発散し、話がとびとびになったのでは合意をはかりにくい。その収束をはかるための技術としてアナライザーを用いることとした。すなわち、図2のように、集団の押しボタン操作による反応を瞬時に集計し、結果をテレビ画面に写し出す装置を移動可能なように加工開発した。この装置は5肢選択が可能な端末60コまでを接続可能であり、中央処理装置の働きにより多様な集計結果をテレビ上とプリンター上に出力できる。

たとえば時間経過別の回答人数、選択肢別の回答人数と%(図3参照)、回答者個人別の回答プロフィールなどである。(なお、現在では、子機と

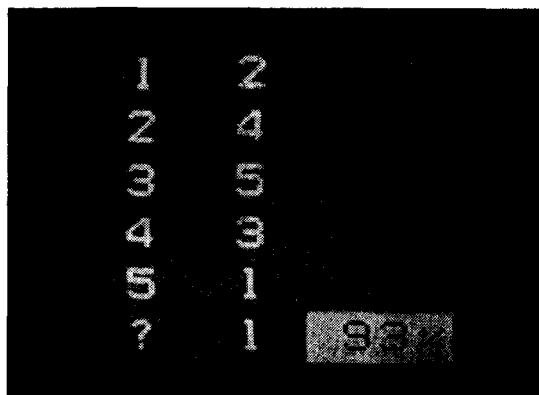


図3 アナライザーよりテレビ画面上への出力例

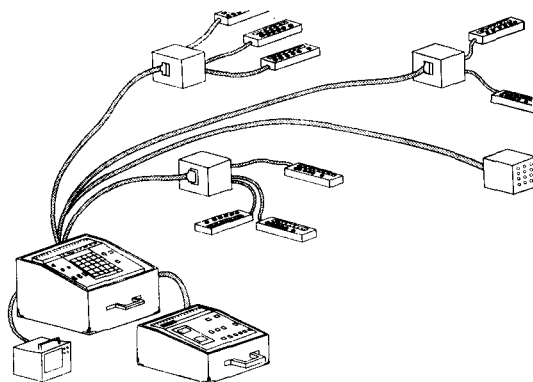


図2 アナライザー構成図

中央処理装置との連結をケーブルによってではなく、無線を用いたワイヤレスアナライザーを開発している。それは子機120まで、子機の表示は0~9までの数値3桁と性能的にも飛躍的に向上している。)

このアナライザーにより、参加者は他に妨げられることなく、匿名性を保ったまま自己の意志を表現できる。しかも瞬時のうちに自己の意見が全体のなかでいかなる位置にあるかを把握できる。そして、この与論の力により議論の展開と収束をはかろうとするのである。

さて、第3の技術は“行って、帰って、また行く”ためのシステム、つまりデルファイ型の運営のための技術である。具体的には、図4のように首長と住民の間で何回も情報の受容、情報の交換、情報の提示のステップをくり返していくシステムをつくったのである。しかもその際、VTR、KJ図解、アナライザーなどのハードおよびソフト技術が活用されていく。

つまり、今回の実験システムは、いま述べたDelphi型のフィードバック技術、Analyzerによる反応収録と提示技術、Video媒体による情報の伝達技術、KJ図解による情報の2次元化技術を有機的に組み合わせたものである。これを、それら各要素技術の頭文字を組み合わせる“DAViKシステム”と呼ぶことにしている。

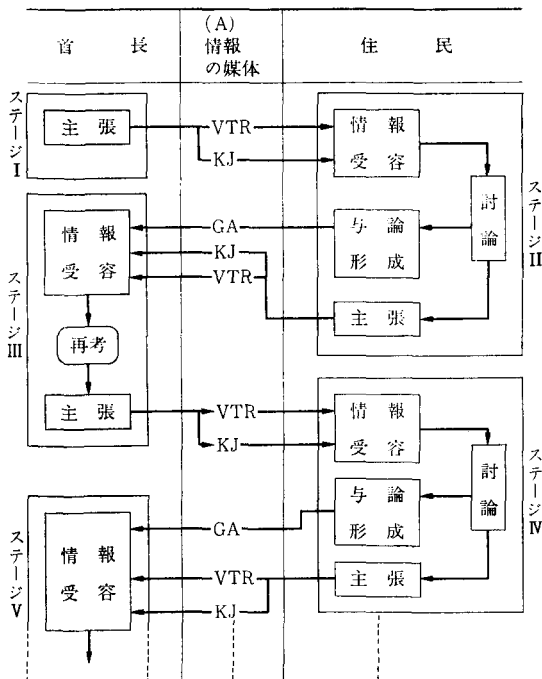


図4 DAViKシステムの概略

5. 合意形成実験の実施

昭和54年度においては、8月に北・北海道の代表的な3つの町（増毛町，羽幌町，天塩町）において「自分の町の5～10年後をいかにするか」をテーマに6回の実験を行なった。つまり各町とも2日ずつ、しかも青年男子と婦人グループ（延べ187名）に対してまったく同じ形式でDAViKシステムのもとで自らの町の将来像形成の試みを行なったのである。

第1日の午前中、町長の話す「わが町づくりの構想」をビデオにおさめる所から実験は始まる。そして、午後と夕方に、婦人と青年のグループが集会所に集まり、町長さんの語る「わが町づくりの構想」をテレビでみる。そして話の要点をまとめたKJ図をもとに、印象の強さ、町政を進める上での優先度をアナライザーを用いて評価する。次に自分たちの考える町の将来像を4、5人のグループごとに語ってもらい録画する。

次の日は朝から町長さんが昨日の自分の話に対する町民の反応を知るとともに、町民の語る町づ



図5 DAViKシステムによる実験風景

くりの構想をテレビでみる。そして再び町民の声に対する自分の考えをビデオにおさめる。そのあと前日と同じ町民が集まり、町長の第2回目のビデオをみる。それとともに、それを集約したKJ図解を用いて、第1回目と同様に「印象度」と「優先度」について評価する。そしてさらに討議を深め、具体化していく。（今回は、日程上の制約より町長の2回目の主張に対する住民の意見集約の段階で実験を終った。）

6. 合意形成過程の分析

この実験の成果は目をみはるばかりである。その経過を示すため、2日間にわたる町長と住民との対話であらわれたすべての論点を目的一手段の連鎖の体系（「新QC7つ道具」の系統図法）にまとめてみる。天塩町の青年と町長との場合を示したのが図6である。

このような目的一手段の体系（系統図）のなかで、第1回目の町長の話位置づけると(A)の部分となる。つまり相対的に低いレベルのしかも部分的な手段に関するものであった。それに対し、青年の主張は(B)の部分であった。それは町長のそれより相対的に高く、より広い部分を覆うもので、両者の間にはごく部分的な重なりしかなかった。だが町長の2回目の話は(C)部分に変わる。それは青年の述べた(B)の部分とほとんど重なりあっている。つまり同じ目的一手段体系を共有したことを

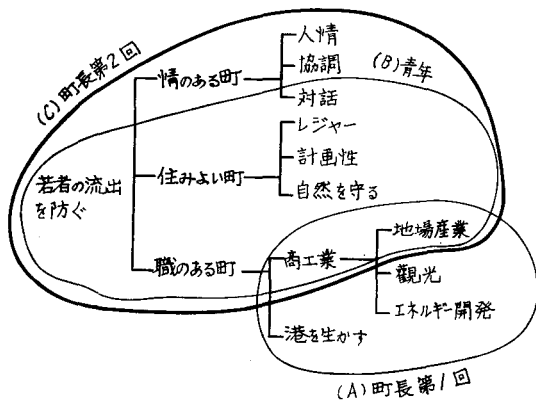


図 6 天塩町における町長と青年との対話

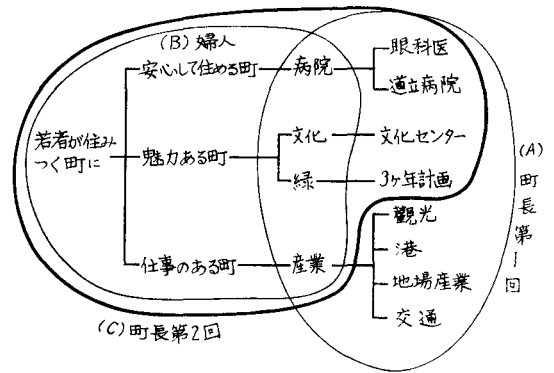


図 7 羽幌町における町長と婦人との対話

意味する。もちろん、両者が完全に一致したままでは議論の進展がない。(C)に示す町長の第2回目の話は、“情のある町”という新しい部分がつけ加えられている。その部分だけ論議が発展したといえる。

以上の天塩町のケースをまとめてみると、次の3点となる。(1)第1回目の主張においては、町長と住民の主張は目的-手段体系のなかできわめて乖離した位置を占める。つまり完全な“すれちがいが”状態がおこる。(2)その時住民はゴールに近く、町長は手段に徹した位置を占める。(3)しかし第2回目の主張においては、首長と住民との間でゴールの共有とそれを達する手段体系のほとんどの部分での重なりが生じる。

このような現象はひとり天塩町の青年のケースだけではない。図7は羽幌町における婦人のケースである。町長の第1回目の話は、観光、港、地場産業の振興などにより産業のある活気づいた町としたい。また文化センターをつくり5カ年計画により美しい緑で埋める。さらに道立病院を充実するとともに不足している眼科医の招致を早めたいといった内容であった。これに対して婦人グループの意見はより高いゴールについての話であった。仕事があり、魅力あり、安心して住める町にしてほしい。それにより若者が町に住みつくようにしてほしいという主張である。

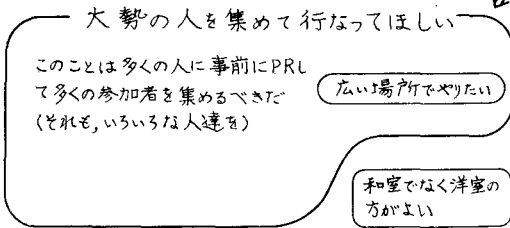
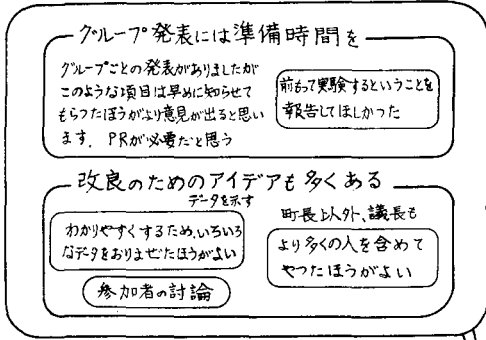
ここでも図7に明瞭にあらわれているように、

住民の目的指向、町長の手段指向による両者の乖離がみられる。しかし、町長の第2回目の話においては、住民のゴールとの共有が生じる。そのゴール達成の手段として自分の主張した手段体系を位置づけている。さらに対象が婦人ということもあり、病院、文化、緑といった領域に話題を集中させるなどの選択が生じている。

そもそも合意過程には4つの段階がある。(1)ゴールの共有、(2)手段体系の確認、(3)手段間の比較検討、(4)手段の選択である。今回のわれわれの行なったDAViKシステムによる実験結果をみるとその第1のステップであるゴールの共有がはっきりと達成されていることがわかる。当初すれちがっていた——首長と住民の間に、町の将来について共通のゴールの理解が達せられている。しかもそれが具体的な手段体系の提示のなかでなされている。このことは、手段体系の確立という第2のステップに1歩すすんでいることを意味する。

もちろん、次のステップにおいては、手段体系の比較検討を通して、手段の選択の合意を得ることが必要であろう。しかし、2日間の実験は、それに達する直前まで社会的合意を進めることができたといえるであろう。(なお実験した他の4ケースについても例示したのとまったく同じ現象がみられている。)

増毛青年部の実験に対する感想



有意義なすばらしいことだ

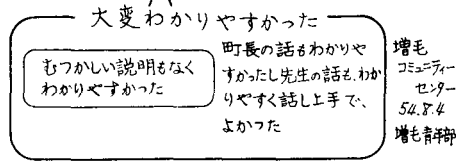
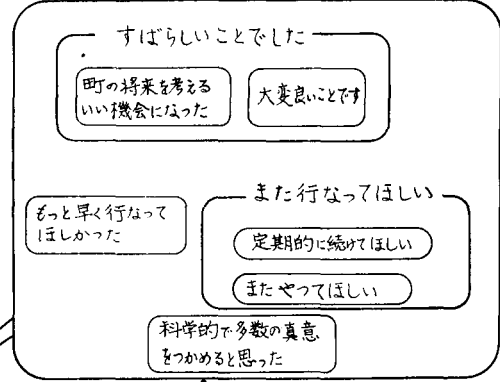


図 8 地元の反応

7. 参加者の評価と反応

いままで述べた町長と住民との対話実験は、参加者にどのようなインパクトを与えたのであろうか。まず何よりも「町の将来について実験以前よりどの程度わかるようになった」のであろうか。羽幌町の婦人では参加者全員が、増毛町ではほぼ86%以上の人々が以前よりわかったと積極的な評価を下している。最も低い天塩町の場合でも3%の者がその効果を認めている。

一方、“以前と変わらない”とその効果を否定する参加者は、最も多い場合でも23%にとどまっている。したがってわずか1回目15分、2回目10分間の町長の話と、それを迎える住民同士の話しあい、かなり町の将来についての目を開かせるものであったといえる。

なによりも大きな効果は、自分達の町の将来を考える意欲を参加者に与えた点である。天塩町の婦人と増毛町の青年の2つのケースを除いて、参加者のすべてが“町の将来を自分達で考えよう”という気持を表明している。その2つのケースでさえも“実験以前と変わらない”人はわずか6～

8%にすぎなかった。

さらに、参加者個人別のアナライザーの回答結果を詳細に分析するといろいろな興味深い事実もわかってきた。町の将来に対する理解度と将来を考える意欲とは高い相関をもつ。しかし、町の将来の理解度と町長の考え方に対する理解度との相関はそれよりは低い。すなわち、町長の話がわかったからといってそれが直ちに町の将来に結びつかない、住民意識の多様性を示しているのである。

最後に参加者のこの実験に対する感想の代表例として増毛町青年の例を示しておこう。図8のように実験を有意義な素晴らしいことと評価し、また行なうことを希望している。さらに小集団においてだけでなく広い場所での大勢の町民を集めて行なうことを提案している。さらに、より積極的に実験を改善するためのアイデアが多く寄せられた。参加者が文字通り参画したことの反映といつてよいであろう。

(この DAViK システムは今年の夏も北・北海道において用いられる予定である。それにより、さらに開発のゴールは明確になるであろうし、また新たな技術もつけ加えられるであろう。)